

若年無業者の心理的諸特性

—就業への意欲とキャリアレディネス・精神健康—

安 保 英 勇

若年無業者の諸属性やキャリアレディネス・精神健康度の実態を把握し、就業への意欲との関連を検討する事を目的とした調査を実施した。調査はWEBにより行われ587名から回答が得られた。結果として、就業への意欲は、学歴の高さ・精神的健康度・就業経験・相談意欲と社会的活動性・キャリアレディネス等と概ね正の関連を示していた。これらを踏まえて、若年無業者への支援策が議論された。

キーワード: 若年無業者、ニート、社会的ひきこもり、キャリアレディネス、WHO-5

1. 問題と目的

若年無業者は早期離職者やニート・ひきこもりと共にここ10年ほどの間、強い関心が寄せられる現象であり、3-6%の青年が該当すると推計されている。若年無業者の定義にはいくつかの考えがあり、広義なものでは、若年無業者を「(1) 高校や大学などの学校及び予備校・専修学校などに通学しておらず、(2) 配偶者のいない独身者であり、(3) ふだん収入を伴う仕事をしていない15歳以上34歳以下の個人」と定義したものがあある。内閣府はこの定義に基づき、2002年の時点で若年無業者を213万人と推定し、15～34歳の6.3%に該当するとした(内閣府, 2005)。一方で、内閣府(2011)は、『子ども・若者白書』の中で、「15～34歳の非労働力人口のうち、家事も通学もしていない者」と若年無業者を定義し、2010年度の若年無業者を60万人としている。調査時期は異なるものの、このように大きな数字の開きが出た主な理由は、前者では失業者(就業していないが仕事を探していた者)や家事従事者を含んでいるのに対し、後者ではそれらを除いているためである。後者の定義はほぼいわゆる「日本型ニート」に対応するものとなっている。

いずれにせよ若年無業者・ニートは今世紀に入り、急激に増加しており(小杉・堀, 2004)、社会的な注目を集めるようになった。この間行政は、ヤングジョブスポット、若者自立塾、ジョブカフェ、地域若者サポートステーションなど種々の政策を打ち出しており、2011年度には「学卒ジョブサポーター」の活用、卒業後3年以内の既卒者の就職促進など予防的対策に重点を置いた様々な施策が遂行中であるが、若年無業者・ニートの人数はここ数年ほぼ変わらない高い水準を維持したままで

ある。一方で、若者無業者の現状に関する報告は、労働政策からの分析(豊泉, 2007)、支援者への調査(小杉・堀, 2003; 新谷, 2006;)、支援の実践例(小嶋, 2005; 牟田, 2006)などは多く見られるが、調査対象は若年無業者自身ではないことが多く、その実態や心理的側面はつまびらかではない。

若年無業者自身を対象とした調査報告も散見され(内閣府, 2005; 小杉, 2004; 篠崎, 2004)、これらからは、ニートあるいは若年無業者のリスクファクターとして、以下の属性や特徴が指摘される。親との離死別、核家族、低世帯所得、低学歴、不登校経験、中退経験、成績の自己評価の低さ、地域の経済状況、就業経験の乏しさ、無業期間の長さ、外出頻度の低さ、健康状態の悪さ、友人関係の少なさ、コミュニケーションの苦手意識、社会に対する関心の薄さ等。しかし、無業者ということもあり、対象者を確保することが困難であるため研究数が少なく、やはりその実態や心理的側面には明らかになっていない部分が多い。今回、若者無業者を直接の対象とした調査から、その諸属性、キャリアレディネス、精神健康(WHO-5)の実態を把握し、更に無業者の類型に基づきそれらの差異について検討を行い、彼らへの支援策を展望する。

2. 方法

対象を若者無業者とした。その定義は、(1) 15歳以上35歳未満、(2) 2011年2月の最終週の7日間にアルバイトも含め収入を伴う仕事をしていない者とし、以下の①～④の者は除いた。①休職中の者、②専業主婦等主に家事をしている者、③家業の手伝いや内職をしている者、④学校に籍のあるもの(高校生、大学生、大学院生、短大生、専門学校生、予備校生、各種学校生など)。

質問項目は、(1) 基本属性(性・年齢・同居する家族・学歴)、(2) 関連属性(要治療の健康問題・就業経験・無業期間・就職希望と求職活動)、(3) 社会関係(ソーシャルサポート・外出状況)、(4) 職業キャリアレディネス尺度(5件法27項目, 板柳, 1996)、(5) 人生キャリアレディネス尺度(5件法27項目, 板柳:1996)、(6) WHO-5(Awataら, 2007)、(7) 若者自立塾に関する項目(認知度・利用希望・自由記述)

また対象者の特性上、調査会社に依頼しWEBによる調査を行った。調査時期は2011年3月15・16日であり、587名から回答が得られた。なお、回答者の居住地は全国に渡るが、調査時期の関係より、東北6県と茨城県の居住者は除かれている。

3. 結果

(1) 基本属性と無業者の類型

内閣府(2005)による無業者の類型を参考に、回答者を就業への意欲が強い順に「求職群(就業を希望し求職活動を行っている者:n=169)」「非求職群(就業を希望するが求職を行っていない者:n=139)」「非希望群(就業を希望せず求職も行っていない者:n=279)」の3群に分類した。この3群間で基本的な属性に相違があるかどうかをまずは検討する。結果を表1に示す。

性別は対象者全体では56.4%が男性であり、無業者の類型による比率の偏りは見られなかった。

家族形態に目を向けると、全体としては親と同居する者は86.4%、一人暮らしをしている者は

10.7%に留まる。自分の配偶者や子どもと同居する者はいなかった。親との同居・独居は無業者の類型により有意な偏りがあり、非希望群で同居が多く一人暮らしが少なかった。高等教育(大学・短大・高専)修了者は全体では35.6%であるが、求職群や非求職群では40%を超えるものの、非希望群では27.2%と低かった。健康問題は、「現在、治療を要するような健康上の問題がありますか?」という問いの後、身体部位を複数並べ、それらへの回答を求めている。全体として多かった健康問題は「精神」21.0%、「皮膚」7.3%などであり、「問題なし」と回答した者は65.2%に留まった。類型別では、「肺・呼吸器」で非求職群が高く求職群で低い傾向、「精神」で非希望群が28.7%と高く求職群で低い(11.2%)、「その他」で非希望群が高い、「問題なし」で求職群が高く(74.6%)、非希望群で60.2%と低かった。

表1 基本属性と無業者の類型

	全 体	求職群	非求職群	非希望群	検定
男性比率	56.4%				n.s.
年齢	27.6歳				n.s.
親との同居	86.4%	80.5%	83.5%	91.4%	$\chi^2(2) = 12.0^{**}$
独居	10.7%	13.6%	14.4%	7.2% [‡]	$\chi^2(2) = 7.1^*$
高等教育修了	35.6%	42.6% [*]	43.9% [*]	27.2% ^{**}	$\chi^2(2) = 17.1^{**}$
健康問題の自覚					
心臓や血管	1.5%				n.s.
肺・呼吸器	1.4%	0% [‡]	2.9% ⁺	1.4%	$\chi^2(2) = 4.7^+$
胃腸	3.7%				n.s.
精神	21.0%	11.2% ^{**}	17.3%	28.7% ^{**}	$\chi^2(2) = 20.8^{***}$
目耳	3.1%				n.s.
皮膚	7.3%				n.s.
骨折・大ケガ	0.9%				n.s.
その他	6.3%	3.0% [‡]	6.5%	8.2% ⁺	$\chi^2(2) = 5.0^+$
上記問題なし	65.2%	74.6% ^{**}	64.0%	60.2% [‡]	$\chi^2(2) = 9.7^{**}$

注)***p<.001、**p<.01、*p<.05、⁺p<.1、各類型におけるセル中の*記号は、当該数値が期待値より比率が高い(下線付きの場合低い)事を示す。以下の表においても同様

(2) 就労経験と無業者の類型

結果を表2に示す。全ての就労に関する変数で無業者類型間に有意な差、あるいは分布の偏りを示した。

なんらかの就労経験のある者は全体で64.2%であったが、求職群で85.2%・非求職群で71.2%と高いが、非希望群では48.0%と低くなっている。就労経験の具体的な内容を見てみると、多い順に「パート・アルバイト」で45.5%、「正社員」で28.1%、「派遣社員」で12.8%「契約社員」で12.8%となる。非希望群はいずれの雇用形態でも経験がない者が多く、求職群で経験のある者が多かった。非求職群は「パート・アルバイト」での就労経験が多かった。

「最後にした仕事から現在まで、どれくらいの期間ですか」という問いで直近の無業期間を尋ねている。平均値では4.3年であるが、非希望群・非求職群・求職群の順に長くなっている。このため、表1では平均年齢には差は見られなかったものの、無業開始年齢では有意差が見られ、非希望群で21.7歳と若年となっている。

表2 就労関係の変数と無業者の類型の関連

	全体	求職群 (G1)	非求職群 (G2)	非希望群 (G3)	検定
就労経験	64.2%	85.2%**	71.2%*	48.0%***	$\chi^2(2) = 67.2^{***}$
正社員での就労経験	28.1%	43.2%***	25.9%	20.1%***	$\chi^2(2) = 28.3^{***}$
契約社員での就労経験	7.7%	14.2%***	7.9%	3.6%***	$\chi^2(2) = 16.8^{***}$
派遣社員での就労経験	12.8%	24.9%***	10.8%	6.5%***	$\chi^2(2) = 28.3^{***}$
パート・アルバイトでの就労経験	45.5%	55.0%***	57.6%***	33.7%***	$\chi^2(2) = 30.0^{***}$
無業期間	4.3年	2.5年	3.6年	5.6年	F(2,584) = 34.8*** G3>***G2>*G1
無業開始年齢	23.3歳	25.2歳	24.3歳	21.7歳	F(2,584) = 27.2*** G2=G1 > ***G3

(3) 社会関係

①相談相手

「どんな仕事を選んだらよいか、どんな人生を歩んだらよいかなど、仕事や人生について、以下の人たちや機関などは、相談相手としてどのくらいあてはまりますか」という問いの下、「家族」「友人・知人」「学校時代の先生」「ハローワーク、ジョブカフェなど就労支援機関」「精神保健センターなどのカウンセリング機関」「インターネット上の掲示板など」の項目を設け、それぞれについて「1.まったくあてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.ややあてはまる、4.よくあてはまる」の4件法で、相談相手としての該当の程度を尋ねた。回答の選択肢(1～4)を連続変数と見なして、無業者の類型を要因とした分散分析を行った。

結果を表3に示す。全体として計算上の中央値2.5を超える相談相手は見あたらず、相談相手として、これらの資源は余り有効ではないといえよう。無業者の類型別にみると、多くの項目で有意差や有意傾向がみられ、全般的に求職活動に積極的な群ほど、それぞれの資源を相談相手として見なす傾向にある。

表3 相談相手と無業者の類型

	全体	求職群 (G1)	非求職群 (G2)	非希望群 (G3)	検定 (自由度はすべて df=2,584)
家族	2.36	2.52	2.30	2.30	F = 2.6 ⁺ 、G1> ⁺ G3
友人・知人	1.88	2.20	1.99	1.63	F = 20.6 ^{***} 、G1> ^{***} G3、G2> ^{**} G3
学校時代の先生	1.31	1.40	1.33	1.24	F = 3.6 [*] 、G1> [*] G3
就労支援機関	1.71	2.09	1.83	1.42	F = 35.0 ^{***} 、G1> [*] G2> ^{***} G3
カウンセリング機関	1.44				n.s.
インターネット	1.58	1.68	1.65	1.48	F = 4.3 [*] 、G1> [*] G3、G2> ⁺ G3
上記の相加平均	1.71	1.88	1.77	1.58	F = 16.1 ^{***} 、G1> ^{***} G3、G2> ^{**} G3

②ひきこもり傾向

外出状況と健康状態から、内閣府(2010)によるひきこもりの定義を参考に、対象者を「非ひきこもり」「準ひきこもり」「ひきこもり」に分類した。具体的には、健康問題の自覚のない者の内、外出状況に関して「遊び等で頻繁に外出する」「人づきあいのためにときどき外出する」と回答した外出に関して活発な群を「非ひきこもり群」、「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」と回答した者を「準ひきこもり群」、「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」など自宅で過ごすことが多い回答者「ひきこもり群」と定義した。

全体としては、「準」を含む「ひきこもり群」は76.0%となり、余り活発でないといえる。無業者の類型に関して χ^2 二乗検定を行ったところ(表4)、偏りは有意であり($\chi^2(4) = 27.1^{***}$)、求職群では「ひきこもり群」が少なく、非希望群では「ひきこもり群」が多いなど、外出の程度と就業への意欲は比例する傾向にあった。

表4 ひきこもり傾向と無業者の類型

	($\chi^2(4) = 27.1^{***}$)			
	全体	求職群	非求職群	非希望群
非ひきこもり群 (n=92)	24.0%	35.7% **	21.3%	16.7% **
準ひきこもり群 (n=159)	41.5%	43.7%	47.2%	36.9%
ひきこもり群 (n=132)	34.5%	20.6% **	31.5%	46.4% **
	100%	100%	100%	100%

(4) 人生キャリアレディネス

人生キャリアレディネス27項目に関して、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、二重負荷や無負荷の項目を削除していく作業を繰り返し、最終的に2因子構造を得た(表5)。因子間相関は、0.655とやや高めである。

第1因子は、「21. 将来の生き方は、自分にとって重要な問題なので、真剣に考えてきている」「3. ど

のような生き方がよいか自分に向いているのか、真剣に考えたことがある」「1. これからの人生や生き方について、とても関心を持っている」などに高い負荷量を示し、人生に対し真摯に向き合う態度に関連していることから、「真摯性」と名付けた ($\alpha=.921$)。「真摯性」11項目のうち、7項目は先行研究(板柳, 1996)の「関心性」に、4項目は「自律性」に含まれる項目であった。

第2因子は、「7. 希望する生き方を送るための具体的な計画を立てている」「9. 充実した人生を送るための計画に沿って、すでに取り組んでいることがある」「27. 今希望している人生や生き方は自分なりに実現できそうだと思う」など、今後の人生に対する具体的イメージやそれに向けての作業に関連する項目から成ることから、「具体性」と命名した ($\alpha=.829$)。「具体性」7項目のうち、6項目は先行研究(板柳, 1996)の「計画性」に、1項目は「自律性」に含まれる項目であった。

表5 人生キャリアレディネス尺度の因子分析結果

	I 真摯性	II 具体性
21. 将来の生き方は、自分にとって重要な問題なので、真剣に考えてきている	.919	-.123
3. どのような生き方がよいか自分に向いているのか、真剣に考えたことがある	.889	-.179
1. これからの人生や生き方について、とても関心を持っている	.809	-.046
14. これからの人生は、自分で責任を自覚して送ろうと思う	.772	-.012
20. 今後の人生を充実させるために参考となる話に耳を傾けるようにしている	.753	.043
5. どんな生き方をしていけばよいかは、最終的には自分自身の責任で決める	.721	-.132
15. 今後の人生で困難なことに突き当たっても、自分なりに克服していこうと思う	.705	.065
24. 人生を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする	.621	.203
19. 人生設計や生き方にはあまり関心がない	-.619	.164
2. 希望する人生を送るにはどうすればよいか、調べたことがある	.603	.198
10. 人生設計や生き方についての記事には、よく目を通すようにしている	.442	.262
7. 希望する生き方を送るための具体的な計画を立てている	.068	.835
9. 充実した人生を送るための計画に沿って、すでに取り組んでいることがある	.012	.820
27. 今希望している人生や生き方は自分なりに実現できそうだと思う	-.083	.752
25. 自分の今後の人生は、だいたい想像できる	-.164	.666
8. どのような生き方をしたいか、まだわからない	.191	-.541
4. これからの人生は、自分の力で切り開いていくことができる	.322	.457
18. これからの人生設計は、自分の個性と社会状況の両面から充分考えている	.380	.439

因子ごとの平均点に対し、無業者の類型を要因とした分散分析を行ったところ、「真摯性」では求職群>非求職群>非希望群 ($F(2,584)=30.4, p<.001$)、「具体性」では求職群>非求職群・非希望群、($F(2,584)=10.3, p<.001$)となった(表7)。

表6 職業キャリアレディネス尺度の因子分析

	I 積極性	II 準備性	III 曖昧性	
14. 職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う	.955	-.139	.023	
15. 職業生活を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする	.802	.040	-.103	
6. 職場で難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う	.795	.027	-.027	
4. 職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行おうと思う	.778	.077	.015	
24. 職業生活を通して、さらに自分自身を向上させたい	.724	.057	-.030	
5. 充実した職業生活を送れないのは、自分自身の責任が大きいと思う	.477	-.027	.292	
22. 職業の選択・決定では周囲の雰囲気流されることはない	.459	.016	-.032	
13. 就職の準備は、他の人から言われなくても自主的に進めることができる	.447	.328	-.167	

11. 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している	-.117	.993	.206	
10. 職業や就職に関する記事には、よく目を通すようにしている	-.082	.933	.206	
7. 希望する職業に就くための具体的な計画を立てている	.164	.630	-.234	
18. すでに計画に従って就職試験のための勉強をしている	.001	.620	-.289	
2. 希望する職業に就くにはどうすればよいか、調べたことがある	.289	.533	.096	
1. 将来の職業や就職について、とても関心を持っている	.355	.502	.058	
20. 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞いている	.383	.435	.054	
9. 職業選択や就職は、自分の個性と就職機会の両面から十分考えたことがある	.357	.427	.069	
25. 自分の将来の職業生活の様子は、だいたい想像できる	.076	.402	-.264	

8. どのような職業に就きたいか、まだわからない	-.027	.012	.761	
16. 自分が将来どのような職業についているか、わからない	.272	-.195	.738	
26. 今希望している職業は、またすぐにも変わるかもしれない	-.047	.242	.581	
23. 職業人になっても、責任の重い仕事はやりたくない	-.161	.110	.490	

	因子間相関	I	II	III
	I	—	.666	.016
	II	—	—	-.266

(5) 職業キャリアレディネス

職業キャリアレディネス27項目に関して、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、二重負荷や無負荷の項目を削除していく作業を繰り返し、最終的に3因子構造を得た(表6)。因子間相関は、I - II間は0.666とやや強めで、II - III間は弱い負の相関、I - III間は無相関であった。

第1因子は、「14. 職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う」「15. 職業生活を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする」「6. 職場で難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う」などに高い負荷量を示し、職業生活に対し前向きな態度に関連していることから、「積極性」と名付けた($\alpha = .908$)。「積極性」7項目は、すべて先行研究(板柳, 1996)における「自律性」に含まれる項目であった。

第2因子は、「11. 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している」「10. 職業や就職

に関する記事には、よく目を通すようにしている」「7. 希望する職業に就くための具体的な計画を立てている」など、就職に向けて関心を持ち種々の準備活動に関与する項目から成ることから、「準備性」と命名した ($\alpha = .887$)。「準備性」9項目のうち、5項目は先行研究(板柳, 1996)の「関心性」に、4項目は「計画性」に含まれる項目であった。

第3因子は、「8. どのような職業に就きたいか、まだわからない」「16. 自分が将来どのような職業についているか、わからない」「26. 今希望している職業は、またすぐ変わるかもしれない」など、方向が定まらず不安定な状況を示す項目から成ることから、「曖昧性」と命名した ($\alpha = .741$)。「曖昧性」4項目のうち、3項目は先行研究(板柳, 1996)の「計画性」に、1項目は「自律性」に含まれる項目であった。

因子ごとの平均点に対し、類型を要因とした分析を行ったところ、「曖昧性」では有意差がなかったが、「積極性」「準備性」では、求職群 > 非求職群 > 非求職群となった ($F(2,258) = 52.8^{***}$, $F(2,258) = 87.7^{***}$ 、表7)。

表7 キャリアレディネス各因子の平均点とそれに対する分散分析

	全体	求職群 (G1)	非求職群 (G2)	非希望群 (G3)	検定 (自由度はすべて df=2,584)
人生キャリアレディネス					
真摯性	3.24	3.57	3.31	3.00	$F = 30.4^{***}$, $G1 > **G2 > ***G3$
具体性	2.64	2.87	2.55	2.54	$F = 10.3^{***}$, $G1 > **G2 = G3$
職業キャリアレディネス					
積極性	3.34	3.74	3.50	3.01	$F = 52.8^{***}$, $G1 > *G2 > ***G3$
準備性	2.81	3.39	2.94	2.38	$F = 87.7^{***}$, $G1 > ***G2 > ***G3$
曖昧性	3.31				n.s.

(6) 精神的健康 (WHO - 5)

WHO-5は全般的に不良であり、カットオフ値(12点以下)を下回る者の割合は、70.4%を占め、平均点自体も9.4点と鬱状態が疑われる得点域にある。平均点は無業者の類型により差があり、求職群 > 非求職群 ($F = 4.3^*$)、という結果となった。

表8 精神的健康 (WHO-5) と無業者

	全体	求職群 (G1)	非求職群 (G2)	非希望群 (G3)	検定
合計点	9.4	10.9	9.6	9.3	$F(2,584) = 4.3^*$, $G1 > *G3$
カットオフ値以下の比率	70.4%				n.s.

4. 考察

(1) 若年無業者の属性

家族形態では、若年の無業者は親との同居率が高く、就業に消極的な群ほどその傾向が高かった。内閣府の報告では、非希望群で年収300万未満の世帯は1/3を超えており(内閣府, 2005)、経済的な理由が親との同居の背景として考えられる。

学歴では、非希望群において高等教育の修了者が27.2%と他の2群と比べて低い比率であり、先行研究とも概ね一致する結果であった(内閣府, 2005)。非希望群での学歴をさらに詳細に見てみると、中学27.6%、高校37.3%、大学21.1%となっており、中学校を最終学歴とするものが多かった。このことから、学校におけるキャリア教育は、小中学校段階でより重点的に行う事の重要性が指摘できよう。

一方、青少年の社会的自立調査(内閣府, 2005)では非希望群での高校中退者は17.6%と高いことを述べており、本調査の中卒者には高校中退者も含まれている可能性を否定できない。また青少年の社会的自立調査(内閣府, 2005)では、非希望群における中学校時の不登校経験者は31.3%に昇ることを報告しており、不登校の中学生の半数程度は高校進学をしない現象も認められている(森田, 2003)。これらのことより、非希望群では学校生活や集団への適応に困難がある者も含んでいる事が示唆される。

健康に問題のない者は、全体で74.6%であった。平均年齢が20歳代後半であることを考えると、高い数字とはいえない。しかし就業構造基本調査(総務省, 2008)によると、若年無業者の求職活動を行わない理由で最も多かったものは「病気・けがのため」であり、男女とも3割程度の者がこの理由を挙げ、青少年の社会的自立調査(内閣府, 2005)においても自分の健康状態を「良好」「まあ良好」と回答した若年無業者は70%前後に留まっており、今回の結果と符合する。従って、ニートの原因を本人の労働意欲の問題と見る風潮があるが、これらの知見から、また就業に消極的な人ほど健康問題を抱えやすいという今回の結果から、傷病のため働こうにも働けない人々が少なからずいることにも改めて留意しなければならない。また、健康問題の中でも最も多かったのは「精神」の領域であった。若年無業者の生活満足度は有業者より低い(内閣府, 2005)ことも報告されており、職に就いていないこと自体、一般的にストレスフルな状況と思われ、無業であることと「精神」の問題は、互いに原因-結果となる悪循環を形成している可能性も指摘されよう。

(2) 就労経験

非希望群は求職群に比べ、いずれの雇用形態においても就労経験に乏しく、無業期間が長く、無業状態となる年齢も若かった。非希望群の就労経験の乏しさは従来から指摘される点である(内閣府, 2005)

(3) 対人関係

全体として76.0%がひきこもり状態にある推測され、若年無業者には社会的活動性が低い者が多いと思われる。従来、ニートとひきこもりはそれぞれ独立に扱われてきたが、密接な関係があることが示唆された。

青少年の社会的自立調査(内閣府, 2005)では、若年無業者の悩みを検討しているが、求職群では「就職や仕事のこと」に対する回答が最も多く、70.1%の者が挙げ、職のない者が持つ悩みとして理解できる。本研究ではそういった悩みに対する相談相手の選好度を尋ねているが、いずれも芳しくなかった。特に家族に関しては、ほとんどの者が同居しているにもかかわらず、過半数の者が「まったくあてはまらない」または「あまりあてはまらない」と回答し、相談相手として見なされにくい傾向がある。ひきこもりに関しては、内閣府の調査(2010)が詳しいが、それによると、ひきこもり者は一般の青年と比べ、家族との情緒的絆が弱いことが指摘されており、本研究の対象者においても率直に相談事ができるような家族関係ではないことが考えられる。単なる印象の範囲を超えるものではないが、実際の心理相談において、無業者の家族が本人ないし単独でその状況の解決を主訴として来談することも多いが、本人を交えた家族間で問題の解決に向けてじっくり話し合うということはあまり聞かない。緊張をはらむ会話となるため、なるべくその話題に触れないようにする家族も多く、また前述のように無業状態が長期化・常態化しているため、改まった相談ということにはなりにくい面もありうる。

一方、一般的に家族と並んで大きな相談資源となりうる友人・知人に関しても同様に選好されにくい結果であった。この背景には、ひきこもり状態による社会関係の狭小化が考えられ得る。内閣府の調査(2010)では、ひきこもり者は、友人関係の問題や不登校など学校生活の不遇な諸経験や職業経験の乏しさ、社会的スキルに対する低い自己評価が指摘されており、そもそも家族以外の人間関係を構築することが困難な状況や心境にあることが推測される。また自身の能力に関しての低評価も報告されており(内閣府, 2010)、率直な自己開示を阻害していることも考えられ得る。

家族・友人以外の公的相談機関等への相談意欲もおしなべて低い。先の内閣府の調査(2010)では、ひきこもり者に対し、「現在の状態について、関係機関に相談したいと思いますか」と尋ねているが、「思わない」という回答が最も多く66.1%を占めていた。続く質問でその理由などを尋ねているが「行っても解決できないと思う(31.3%)」「親身に聴いてくれる(32.2%)なら相談したい」などが挙げられている。また高野ら(2006)は、大学生が学生相談所を利用しようとする際に予め知っておきたい情報を整理し、利用するための基礎情報(場所や開室時間など)、相談環境(相談員の情報)、相談所の活動内容(利用者数、一般的な相談内容)などを主なものとして挙げ、潜在的利用者への相談機関に関する情報提供の重要性を指摘している。このような点を踏まえて関係機関は、ユーザーのニーズや状況を踏まえて来談への抵抗感を少しでも減じるような、あるいはひきこもりがちな無業者にも利用されやすいような工夫をなすべきであろう。一方で、内閣府の調査(2010)では実際に関係機関に相談したことがあるひきこもり者は50.0%であり、比較的多数の者が社会的相談資源を利用した経験があるにもかかわらず、先に見たように相談意欲が低い事態となっている。無業者にお

いても同様の状況もありうると思われ、関係機関においては来談者を再来に結びつけるような工夫が望まれよう。

(4) キャリアレディネス

キャリアレディネスは、一般的にはキャリアに関する諸問題に対する個人の対処準備性であり、板柳(1996)はこれを人生キャリアレディネス(人生や生き方への取り組み姿勢)と職業キャリアレディネス(職業選択と職業生活への取り組み姿勢)に分けており、本研究ではこの2つを測定する尺度を用いている。結果は、概ね就業に対し前向きな群ほど、キャリアレディネスが高いというものであった。先行研究では、キャリアレディネスの高さが労働者の職業生活における適応や職務満足度等にポジティブな関連を示すことが(堀越ら, 2006; Zikic ら, 2006)示されているが、無業者においてもレディネスの高さが就職の準備活動の高さと関連することが本研究で示された。従ってキャリアレディネスを上昇させるような要因を先行研究より参照することが、若年無業者への支援を示唆することになると思われる。大学生を対象とした研究では、まず「キャリア教育論(桐村, 2005)」や「キャリアデザイン(森山, 2007)」などいわゆる「キャリア教育」の受講がキャリアレディネスを上昇させること報告されている。先の教育歴に関する結果からは、早期の段階からのキャリア教育が望ましく、年齢に見合った内容が求められる。またインターンシップへの参加に関する報告も多い。例えば、インターンシップに参加した大学生は参加していない者よりも、キャリアレディネスが上昇し(飛田, 2007, 楠奥, 2006)、なかでも実際の業務などを行う実務型のインターンシップが有効であったことを示している(飛田, 2007)。

一方で、この研究で述べてきたキャリアレディネスの高低は相対的なものである。この尺度は5件法であるため、3点以上(曖昧性では3点未満)が肯定的な反応となる。この観点で見ると、無業者全体の平均点で3点を超えている因子は人生キャリアレディネスの真摯性、職業キャリアレディネスの積極性であり、3点未満は人生キャリアレディネスの具体性、職業キャリアレディネスの準備性・曖昧性である。このことから、人生や職業に対して向き合う態度はある程度認められるが、目標がはっきりせず具体的な準備や活動に取り組めていない、という無業者の全体的な像が浮かび上がってくる。また先に類型別にみた、非希望群の就労経験の乏しさもこの見立てを支持する結果であろう。従って、全般的な支援として、これらの低得点の因子に対する働きかけ、より具体的にはインターンシップのような体験的理解の機会提供が効果的と思われる。

(5) 精神的健康

精神健康の指標とした WHO-5 は平均点が9.4点であり、うつ病のための精査が必要とされる12点以下の者は、70.4%に達した。追加的な分析として、平均点に関して、「精神」の健康問題を有する者と有さない者との間で平均値の差の検定を行ったところ有意差が見られたが($t=3.2^{**}$)、有さない者の平均点も10.2点とやはり低かった。翻訳から日が浅いため比較しうる日本でのこの尺度を用いた研究は少ないが、Awata ら(2007)は、平均点16.7点(うつ病エピソードのない糖尿病患者が対

象)、岩佐ら(2007)は、16-18点(地域高齢者が対象)と述べており、これら精神的健康が良好とは見なされにくい集団に対して行われた調査結果と比べても、明らかに低い。

この点数の低さが就職への取り組みを阻害していると見ることができるであろうし、また、社会に参画できていないという状況が気分の低下を招いていることも想定される。他方、調査時期の問題も考慮しなければならない。今回の調査は因らずも東日本大震災の4日後に行われている。この為、震災からの種々の影響が反映された結果でもあることに留意すべきであろう。

いずれにせよ、この精神的健康の低さは問題であり、このような状態にある者が即座に就業とはなりにくいであろうし、まずは適切な医療機関・相談機関での対応が望まれ、時には「見守り」といった待ちの姿勢が必要かもしれない。従って支援の第一歩は無業者の状態のアセスメントとなるであろう。また、一口に若年無業者といってもそのありようは多様である。実際の支援に当たっては、精神的健康のみならず、家族関係、対人関係、健康状態、過去の就労経験、引きこもり傾向、キャリアアレイティネスなど多方面からアセスメントを行い、無業者の個別性に十分配慮した支援が求められよう。

【付記】

本研究は文部科学省科学研究費補助金による助成を受けた「若者自立塾プログラムが利用者に与える影響に関する心理学的研究(研究代表者:安保英勇)」の成果の一部である。

【文献】

- Awata,S. Bech,P.,Yoshida,S., Hirai, M., Suzuki, S., Yamashita, M., Ohara, A., Hinokio, Y., Matsuoka, H. and Oka, Y. 2007 Reliability and validity of the Japanese version of the World Health Organization - Five Well - Being Index in the context of detecting depression in diabetic patients Psychiatry and Clinical Neurosciences 61 (1), 112-119.
- 堀越弘・渡辺三枝子 2006 成人前期におけるキャリア環境変化対応性への影響要因 ―生涯キャリア発達の視点に立って― 経営行動科学, 19, 162-174.
- 飛田浩平 2008 大学生のインターンシップの効果に関する実証的研究:近畿大学経営学部を事例として 近畿大学経営学部卒業論文.
- 板柳恒夫 1996 大学生のキャリア成熟に関する研究―キャリア・レディネス尺度(CRS)の信頼性と妥当性― 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 20, 9-18.
- 桐村晋次 2005 大学におけるキャリア教育の意義と方法 国際経営フォーラム, 16, 41-62.
- 小杉礼子 2004 若年無業者増加の実態と背景―学校から職業生活への移行の隘路としての無業の検討 日本労働研究雑誌, 46(12), 4-16.
- 小杉礼子・堀有喜衣 2003 学校から職業への移行を考える諸機関へのヒアリング調査結果―日本におけるNEET問題の所在と対応, 日本労働研究機構ディスカッションペーパー 03001.
- 小杉礼子・堀有喜衣 2004 若年無業・周辺のフリーター層の現状と問題 社会科学研究, 55(2), 5-28.
- 小嶋貴子 2005 地方自治体におけるキャリアと就業支援の実践―彩の国キャリア塾について 日本労働研究雑誌,

47(6), 68-78.

- 楠奥繁則 2006 自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究—ベンチャー系企業へのインターンシップを対象にした調査— 立命館経営学, 44, 169-185.
- 森田洋司 2003 不登校その後—不登校経験者が語る心理と行動の軌跡— 教育開発研究所.
- 森山廣美 2007 大学におけるキャリア教育—その必要性と効果判定の視座から— 四天王寺国際仏教大学紀要, 44, 309-319.
- 牟田武生 2006 ニートからの脱出:自立支援塾 教育と医学, 54(7), 640-646.
- 内閣府 2005 青少年の就労に関する研究調査.
- 内閣府 2010 若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査).
- 内閣府 2011 子ども・若者白書(平成23年版).
- 篠崎武久 2004 非就業・非在学・非求職中の若年無業者(NEET)に関する一考察—日本版総合社会調査(JGSS)から見るNEET, 失業者, 就業者の比較—, JGSSで見た日本人の意識と行動:日本版 General Social Surveys 研究論文集3, 121-134.
- 新谷康浩 2006 若年者就職支援施設における若者へのまなごしの地域間比較 横浜国立大学教育人間科学部紀要I 教育科学, 8, 51-64.
- 総務省統計局 2008 平成19年就業構造基本調査結果の概要(速報)
- 高野明・吉武清實・池田忠義・佐藤静・関谷佳代・仁平義明 2006 学生相談活動における情報提供のあり方についての検討—学生が求める情報についての質的分析から— 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 1, 91-97.
- 豊泉周治 2007 ニートとNEET, ニートのいない国—日本・デンマーク比較研究 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 56, 103-115.
- 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵・稲垣宏樹・河合千恵子・大塚理加・小川まどか・高山緑・蘭牟田洋美・鈴木隆雄 2007 「WHO-5精神的健康状態表」の信頼性ならびに妥当性—地域高齢者を対象とした検討— 厚生の指標, 54(8), 48-55.
- Zelic,J. & Klehe,U 2006 Job loss as a blessing in disguise: The role of career exploration and career planning in predicting reemployment quality Journal of Vocational Behavior, 69,391-409.

The Psychological Characteristics of Japanese Unemployed Youth

: motivation to work, career readiness and mental health condition

Hideo AMBO

(Associate professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this study was to investigate the reality of personal attributions, career readiness and mental health condition among Japanese unemployed youth and to analyze the relationship between these variables and their motivation to work. The data was collected via web and consisted of 587 participants. The motivation to work showed correlated positive correlation with educational record, mental health condition, working experiences, willingness for consultation, tendency to go forth the house and career readiness. On grounds of these findings, assistance strategies for unemployed youth were discussed.

Keywords : unemployed youth, NEET, social withdrawal, career readiness, WHO-5